

孔子の倫理哲学論（6）  
— 道德論を中心として —

浅井茂紀

目 次

I 序 論

II 本 論

第1節 孔子の我

第2節 孔子の吾

第3節 孔子の思

第4節 孔子の命

第5節 孔子の言

III 結 論

## I 序 論

論者は、「孔子の倫理哲学論（6）—道德論を中心として—」と題して論説する。その目次は前記の如しである。そして、「孔子の倫理哲学論（6）」（以下、この論文では先のサブ・タイトルは時に省略する）の項目や内容の説明や記述はもとよりのこと、且つ、カントの『純粹理性批判』での「哲学する」(philosophieren)<sup>(1)</sup> ことや異文化で、宗教上のイエス・キリスト (Jesus Christ) の「心のきよい者は幸いです。その人は神を見るからです。」(マタイ, 5—8)<sup>(2)</sup> や「イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」(ヨハネ, 14—6)<sup>(3)</sup> などとある言葉やキリスト教の根本的原理である「愛」(agapê), これらの認識や意識においても、この論文は、「孔子の倫理哲学論（6）」と題して考察することも可能であろう。

論者は、「孔子の倫理哲学論（5）」<sup>(4)</sup>、「孔子の倫理哲学論（4）」<sup>(5)</sup>、「孔子の倫理哲学論（3）」<sup>(6)</sup>、「孟子の進退哲学論—平和活動のために—」<sup>(7)</sup>などの論説でも、すでに儒教や儒学、孔子 (Confucius, 552/551—479 B.C.) や孟子 (Mencius, 372—289 B.C.) の哲学について多少なりともリサーチ (researches) を実践してきた。

従って、今回もそれらのシリーズ (series) として記述する。今回のこの論説は、以前のそれらの続きでもある。最初に、

1. 孔子の我について、我とは何かを問題にする。孔子自身は我をどう認識して、何に配慮していたか。さらに、どういうものを彼自身の取り柄としていたか。また、彼自身をよく知ってくれているものとして、どういうものを期待していたかなどが思考されよう。
2. 孔子の吾について、吾とは何かを問題にする。孔子自身は吾をどう認識し自覚して、人生設計を配慮していたか。さらに、弟子との問答はどうであったか。当時、孔子は、聖人を見ることが可能であったか。また、我と吾の相違も問題となろう。
3. 孔子の思について、思とは何かを問題にする。孔子自身は思をどう認識して、『詩経』についてどういう思いであったか。学問と思考との相違はどうであったか。一日中食事も

(1) Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, Verlag von Felix Meiner in Hamburg, 1956, A837, B865—A838, B866, S. 752—753.

カント『純粹理性批判』(下) 篠田英雄訳, 岩波書店, 昭和41年, 128ページ, 参照。

(2) 新改訳聖書刊行会『新約聖書, *The New Testament*』(英和対照) 日本聖書刊行会, 昭和52年, 9ページ。

“Blessed are the pure in heart, for they shall see God.” (Matthew, 5—8).

(3) *ibid.*, p.286. Jesus said to him, “I am the way, and the truth, and the life; no one comes to the Father, but through Me.” (John, 14—6).

(4) 拙稿「孔子の倫理哲学論(5)—道德論を中心として—」(論説)『千葉商大紀要』第47巻第1号, 千葉商科大学国府台学会, 2009(平成21)年9月30日発行, 1—14ページ。

(5) 拙稿「孔子の倫理哲学論(4)—道德論を中心として—」(論説)『千葉商大紀要』第46巻第3号, 千葉商科大学国府台学会, 2008(平成20)年12月31日発行, 1—12ページ。

(6) 拙稿「孔子の倫理哲学論(3)—道德論を中心として—」(論説)『千葉商大紀要』第45巻第3号, 千葉商科大学国府台学会, 2007(平成19)年12月31日発行, 1—12ページ。

(7) 拙稿「孟子の進退哲学論—平和活動のために—」(論説)『千葉商大紀要』第38巻第2第3合併号, 千葉商科大学国府台学会, 2000(平成12)年12月31日, 57—74ページ。

また、拙著『哲学要論』, 高文堂出版社, 2006(平成18)年2月2日, 5刷発行, 181—223ページ, など。

せず、一睡もせずに思索することと学問との価値の相違はどうであったかなどである。

4. 孔子の命について、命とは何かを問題にする。孔子自身は命をどう認識して、命や生命にかかわる場合どういう思いであったか。さらに、「命」はいのちや生命だけでなく、天命との関わりなどはどうであろうか。それは、人間としての最高の徳に内包され、君子として、肝心なもののカテゴリーに入るかどうかなどが問われよう。

5. 孔子の言について、言とは何かを問題にする。孔子自身は言をどう認識していたか。どういう状態で言は有るべきであったか。君子は、言と実行とのあり方はどうであったか。言語などに優れた弟子達は誰であったかも重要であろう。

かくして、中国の春秋時代、聖人・孔子は、何故これら我、吾、思、命、さらに、言などの倫理 (Ethics ; Ethik ; éthique) や道徳哲学 (moral philosophy) を主張したのかを問題にしてみたい。孔子の倫理的な哲学 (Ethical philosophy) は、人間としての基本的な理念 (Idee) ではなかろうかと、論者は思考するのである。

次に、II本論 第1節 孔子の我から説明する。

## II 本論

### 第1節 孔子の我

『論語』における孔子の我、すなわち、孔子の言う我とは何かを問題にしてみる。

□□孟懿子 (もういし) 孝を問う。子曰く、違 (たが) うこと無しと。樊遲御たり。子之に告げて曰く、孟孫孝を我に問う。我對 (こた) えて曰く、違 (たが) うこと無しと。樊遲曰く、何の謂ぞやと。子曰く、生けるには之に事えるに禮を以てし、死せるには之を葬るに禮を以てし、之を祭るに禮を以てす。(為政2)、(傍点筆者)<sup>(8)</sup>。

魯の大夫である孟懿子 (孟孫) が親孝行の道を質問した。孔子は、「違 (たが) うこと無し」と答えた。その帰途、馬車の御者をつとめていた門人の樊遲に、孔子は、「孟孫が孝について私に尋ねたので、私は『違 (たが) うこと無し』と答えた」と話された。すると樊遲は、「それはどういう意味ですか」と尋ねた<sup>(9)</sup>、ということである。つまり、「違 (たが) うこと無し」とは、礼に違 (たが) うなという事だと孔子は述べている。これら、孟孫と孔子の言葉に、「我 (me, I)<sup>(10)</sup>」の言葉がある。共に、私や自分という意味であろう。

(8) 孟懿子 (もういし) 問孝。子曰、無違。樊遲御。子告之曰、孟孫問孝於我。我對曰、無違。樊遲曰、何謂也。子曰、生事之以禮、死葬之以禮、祭之以禮。(為政2)、(傍点筆者)。

宋朱子 (朱熹) 集註『四書集註』香港太平書局、1964年、論語卷一、為政第二、8ページ。

宋朱子 (朱熹) 集註『四書集註』台湾中華書局、中華民國66年、論語卷一、為政第二、8ページ。

慧豐學會『漢文大系』(一)、新文豐出版公司、中華民國83年、論語集說、卷一、為政第二、18ページ。四部叢刊經部。『漢文大系』壹 (大學說、中庸說、論語集說、孟子定本)、富山房、明治43年、論語集說、卷一、為政第二、18ページ。

(9) 吉田賢抗『論語』(新釈漢文大系、第1卷) 明治書院、昭和35年、40ページ。

また、注(6)参照。拙稿、前掲論文『孔子の倫理哲学論』、3—4ページ。

(10) James Legge, *THE CHINESE CLASSICS, CONFUCIAN ANALECTS, THE GREAT LEARNING, THE DOCTRINE OF THE MEAN, THE WORKS OF MENCIOUS*, Southern Materials Center, Inc., Taipei, 1985, p.147.

□□子曰く、黙して之を識し、學びて厭わず、人を誨えて倦まず。何か我に有らんや。(述而7)、(傍点筆者)<sup>(11)</sup>。

孔子が言うには、「学問したことを黙って心に記しきざんで覚え忘れないようにして、学問してあきることがない。さらに、自分が体得したことを人にさとしおしえてあきることがない。何かこれ以外に自分には取り柄もない。せめてこの三つだけが自己の為しえることにすぎない。」と<sup>(12)</sup>。そういった内容と意義である<sup>(13)</sup>。

従って、この我 (me)<sup>(14)</sup> は、自分や自己の意味であろう。

□□子曰く、我を知る事莫(な)きかなと。子貢曰く、何爲(なんす)れぞ其れ子を知る事莫からんやと。子曰く、天を怨みず、人を尤(とが)めず。下學して上達す。我を知る者は其れ天かと。(憲問14)<sup>(15)</sup>。

ここでの「我を知る事莫きかな」とか、「我を知る者は其れ天か」の「我」(me)とは、私の意味である。なお、「下學して上達す」とは、手近なことを学んで、次第に高遠なことまで悟りえることであろう<sup>(16)</sup>。次に、孟子における「我」について、

□□孟子曰く、否。我四十にして心を動かさざりき、と。(公孫丑上)<sup>(17)</sup>。

□□孟子曰く、萬物皆我に備わる。身に反して誠なれば、樂しみ焉(これ)より大なるは莫(な)し。(尽心上)<sup>(18)</sup>。

孟子が言う、「万物の道理は、皆自分の本性に備わっている。だから、自分自身に反省してみても誠実であれば、これほど大きい楽しみはない。」と<sup>(19)</sup>。

従って、孟子における我は、私や自分という意味であろう。

ゆえに、孔子の我は、「我對えて曰く、違ふこと無しと。」(為政2)や、「何か我に有らんや。」(述而7)などとあり、この我は私(I)、自分や自己(me)という意味であろう。さらに、「我を知る者は其れ天かと。」(憲問14)などとあり、この我も私の意味である。次に、孟子における我は、「我四十にして心を動かさざりき、と。」(公孫丑上)や、「孟子

(11) 子曰、黙而識之、學而厭、誨人不倦。何有於我哉。(述而7)。

(12) (9)参照。吉田賢抗、前掲書、148ページ。

(13) 拙著『教育哲学要論』、第1節 教育とは何か、高文堂出版社、2002(平成14)年4月1日発行、12ページ。

(14) (10)参照。ibid., p.195. レッグ (James Legge) は、この書 (*THE CHINESE CLASSICS*) で、『論語』(CONFUCIAN ANALECTS) のこの節(述而7)を以下の如く訳している。

The Master said, 'The silent treasuring up of knowledge; learning without satiety; and instructing others without being wearied; which one of these things belongs to me?'

(15) 子曰、莫我知也夫。子貢曰、何爲其莫知子也。子曰、不怨天、不尤人。下學而上達。知我者其天乎。(憲問14)。

(16) 注(9)参照。吉田賢抗、前掲書、323ページ。

(17) 孟子曰、否。我四十不動心。(公孫丑上)。

(18) 孟子曰、萬物皆備於我矣。反身而誠樂莫大焉。強恕而行、求仁莫近焉。(尽心上)。

(19) 内野熊一郎『孟子』(新釈漢文大系、第4巻)明治書院、昭和37年、445ページ。

なお、デカルト (Descartes, 1596—1650) は、その著『方法序説』で、方法的懷疑から出発して、哲学の第一原理である「われ思う、故にわれ在り」(Cogito, ergo sum. = I think, therefore I am. = Je pense, donc je suis.)を主張した。つまり、私があるようにすべてを疑い考えている私の存在することは疑うことができない、という意義であろう。従って、「われ思う、故にわれ在り」=「私は考える、それ故に私はある」。この「われ」は、私の意味である。

また、注(7)参照。拙著、前掲書(『哲学要論』)、64—66ページ。さらに、注(13)参照。拙著、前掲書(『教育哲学要論』)、145—146ページ。

曰く、萬物皆我に備わる。」(尽心上) などとあり、私や自分の意義であると、論者は思考するのである。

## 第2節 孔子の吾

『論語』における孔子の吾、すなわち、孔子の言う吾とは何かを問題にしてみる。

□□子曰く、吾十有五にして學に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲する所に従えども、矩(のり)を踰(こ)えず。(為政2)、(傍点筆者)<sup>(20)</sup>。

孔子が言う、私は15歳頃から學問に志を持った。すなわち、先王の教えである詩書礼楽の學問への決心であった。30歳にして學問の基礎が確立した。すなわち、その専門の詩書礼楽の學問での一家を為した。40歳で不惑、すなわち、物事に惑うことがなくなった。つまり、人格と識見が備わった。50歳で天命を知った。すなわち、天が自分に命じ与えたものが何であるか聖賢の使命を知った。60歳頃で耳順、すなわち、何を聞いても分かるようになった。それは他人の本心まで分かり毀譽褒貶にもとらわれなかった。70歳になって従心、すなわち、自分の心の欲するままに行為しても、規範から越えることがなくなった。つまり、いつも倫理や道德の基準に合致して、道理や道德律に違うことがなくなった<sup>(21)</sup>、というわけである。

この節でのこの吾(I)<sup>(22)</sup>は、私の意味である。

□□子曰く、吾回と言う、終日違わざること愚なるが如し。退きて其の私を省すれば、亦以て發するに足る。回や愚ならず。(為政2)<sup>(23)</sup>。

孔子と顔淵(顔回)との対話におけるこの吾は、自分の意味である。

□□子曰く、聖人は吾得て之を見ず。君子者を見ることを得ば、斯(ここ)に可なり。(述而7)<sup>(24)</sup>。

この吾は、私や自分の意味であらう<sup>(25)</sup>。

□□子曰く、吾嘗て終日食らわず、終夜寝ず、以て思う。益無し。學ぶに如かざるなり。(衛靈公15)<sup>(26)</sup>。孔子の言う、この吾は、私の意味である。

なお、「我」と「吾」との相違については、「我」は時に「我々」の意味もある。

次に、孟子の吾について、

□□卒然として問うて曰く、天下惡にか定まらん、と。吾對えて曰く、一に定まらん、と。(梁惠王上)<sup>(27)</sup>。孟子の「吾對えて曰く」のこの吾は、私の意味である。

(20) 子曰、吾十有五而志於學。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而從心所欲，不踰矩。(為政2)、(傍点筆者)。

(21) 注(9)参照。吉田賢抗、前掲書、37ページ。また、注(3)参照。拙著、前掲書(『教育哲学要論』)、28ページ。

(22) 注(10)参照。James Legge, *ibid* (THE CHINESE CLASSICS), p.146.

(23) 子曰、吾與回言、終日不違如愚。退而省其私、亦足以發。回也不愚。(為政2)。

(24) 子曰、聖人吾不得而見之矣。得見君子者、斯可矣。子曰、善人吾不得而見之矣。得見有恆者、斯可矣。(述而7)。

(25) 注(5)参照。拙稿、前掲論文「[孔子の倫理哲学論(4)—道德論を中心として—]」、第1節 孔子の聖についての説明。3—4ページ。

(26) 子曰、吾嘗終日不食、終夜不寝、以思。無益。不如學也。(衛靈公15)。

(27) 卒然問曰、天下惡乎定。吾對曰、定于一。(梁惠王上)。

□□敢えて問う、夫子悪にか長ぜる、と。曰く、我言を知る。我善く吾が浩然の氣を養う、と。敢えて問う、何をか浩然の氣と謂う、と。曰く、言い難きなり。云々。(公孫丑上)<sup>(28)</sup>。

この「吾が浩然の氣を養う」の吾は、自分の意味であろう<sup>(29)</sup>。

ゆえに、孔子の吾は、「吾十有五にして學に志す。三十にして立つ。」(為政2)とあり、この吾(I; Ich)は、私の意味である。さらに、「子曰く、吾回と言う、終日違わざること愚なるが如し。」(為政2)や「子曰く、聖人は吾得て之を見ず。」(述而7)などこれらの吾も、私や自分の意味であろう。

次に、孟子の吾については、「吾對えて曰く、一に定まらん、と。」(梁惠王上)や「曰く、我言を知る。我善く吾が浩然の氣を養う、と。」(公孫丑上)などとあり、これらの吾も、私や自分の意義であると、論者は思考するのである。

### 第3節 孔子の思

『論語』における孔子の思、すなわち、孔子の言う思とは何かを問題にしてみる。

□□子曰く、詩三百、一言(いちげん)以て之を蔽(おお)う。思(し)無邪(よこ)しま無しと。(為政2)、(傍点筆者)<sup>(30)</sup>。

孔子は言う、詩経三百篇の詩は多種多様であるが、もし一言で全部をおおい尽くせというならば、「思うところ邪念がない」ということに尽きる。つまり、どの詩も作者に邪念や邪悪がなく、純粋な真情の発露とあって良い<sup>(31)</sup>。実際に、すばらしい詩といえよう。

この思(thoughts)<sup>(32)</sup>は、思い、思考や思慮、心に感じるの意味であろう。

□□子曰く、學(まな)びて思(し)わざれば則ち罔(くら)し。思(し)いて學(まな)ばざれば則ち殆(あやう)し。(為政2)、(傍点筆者)<sup>(33)</sup>。

孔子が言う、ひろく学ぶだけで、自分の心に問うてよく思考し研究しないと、学んだ真の道理を把握できない。反対に、自分の貧弱な知識で思い巡らすだけで、ひろく他人のよい言葉や古典を学ばないと、思考が狭量で偏り、危険極まりないものである。

ここの「學びて思わざれば」や「思いて學ばざれば」の思は、思考の意味である。

□□子曰く、吾嘗(た)終日食(た)らわず、終夜寝(た)ず、以て思(し)う。益(えき)無し。學(まな)ぶに如(し)かざるなり。(衛靈公15)<sup>(34)</sup>。

孔子は言う、私はかつて一日中食事もせず、一晩中一眠りもせずに、一心不乱に思索してみた。何も役に立たなかった。先哲の学問や聖賢の教えを手本とすることにこしたことはない<sup>(35)</sup>。孔子は、このような思索よりも、学問を重要視したと言える。

(28) 敢問、夫子悪乎長。曰、我知言。我善養吾浩然之氣。敢問、何謂浩然之氣。曰、難言也。其爲氣也、至大至剛、以直養而無害、則塞于天地之間。(公孫丑上)。

(29) ここでの「我」は、私の意味であり、「吾」は、自分の意味であろう。

なお、時に、『論語』では、我は、我々の意味もありえる。

(30) 子曰、詩三百、一言以蔽之。曰、思無邪。(為政2)、(傍点筆者)。

(31) 注(9)参照。吉田賢抗、前掲書、35ページ。

(32) 注(10)参照。James Legge. *ibid.*, p.146.

(33) 子曰、學而不思則罔。思而不學則殆。(為政2)。

(34) 子曰、吾嘗終日不食、終夜不寝、以思。無益。不如學也。(衛靈公15)。この節は、また、注(26)参照。

(35) 注(9)参照。吉田賢抗、前掲書、351ページ。



この思は、思索の意味であろう。

さらに、『論語』には、「九思」(季氏16)などの熟語もある<sup>(36)</sup>。

次に、孟子における思について、

□□詩に云う、西よりし東よりし、南よりし北よりし、思いて服せざる無し、と。此の謂(いい)なり、と。(公孫丑上)<sup>(37)</sup>。

孟子が言うには、『詩経』にも、「西から東から、南から北からやって来て、武王の徳を思い慕って心服しない者はなかった。」とあるが、このような王者の有様を述べたものである。

ところで、武王とは、周王朝の祖。文王の長子。弟の周公旦を補佐とし、太公望を師として、殷の紂王を討ち天下を統一した<sup>(38)</sup>。この思は、思う意味であろう。

□□是の故に誠は、天の道なり。誠を思うは、人の道なり。至誠にして動かざる者は、未だ之れ有らざるなり。(離婁上)<sup>(39)</sup>。この「誠を思うは」の思も、思う意味である。

なお、孟子には、「心思」(離婁上)<sup>(40)</sup>、などの熟語も存在するのである。

ゆえに、孔子の思は、「子曰く、詩三百、一言以て之を蔽う。思い邪(よこ)しま無しと。」(為政2)の如く、この思(thoughts)は、思い、思考や思慮、心に感じるの意味であろう。さらに、聖人・孔子は、「學びて思わざれば則ち罔し。思いて學ばざれば則ち殆(あやう)し。」(為政2)などと述べて、これらの思は、思考や思索などの意味がある。

次に、堯聖・孟子における思については、「思いて服せざる無し」(公孫丑上)や「誠を思うは、人の道なり。至誠にして動かざる者は、未だ之れ有らざるなり。」(離婁上)などとあり、これらの思は、思う意義であろうと、論者は思考するのである。

#### 第4節 孔子の命

『論語』における孔子の命、すなわち、孔子の言う命とは何かを問題にしてみる。

□□曰く、今の成人とは、何ぞ必ずしも然(しか)らん。利を見て義を思い、危うきを見て命を授け、久要平生の言を忘れずんば、亦以て成人と爲すべし。(憲問14)、(傍点筆者)<sup>(41)</sup>。

孔子は言う、「今日の完成された人物とは、何も必ずしも完璧な人物を求めなくてもよい。利を見て、その利が義にかなっているかを配慮して、生命を投げ出さなくてはならない場合には、潔く一命を捧げ、古い約束は平生の自分の言葉を忘れないで実行する人物であれば、今日ではこの人を成人、すなわち、完成された人格者といってよい。」と教えたというわけである<sup>(42)</sup>。この命(life)<sup>(43)</sup>は、生命、いのちである。

<sup>(36)</sup> 孔子の「九思」の熟語については、「孔子曰、君子有九思。視思明、聽思聰、色思溫。貌思恭、言思忠、事思敬、疑思問、忿思難、見得思義。(季氏16)、とある。

<sup>(37)</sup> 詩云、自西自東、自南自北、無思不服。此之謂也。(公孫丑上)。

<sup>(38)</sup> 注(19)参照。内野熊一郎、前掲書、105ページ。

<sup>(39)</sup> 是故誠者、天之道也。思誠者、人之道也。至誠而不動者、未之有也。不誠、未有能動者也。(離婁上)。

<sup>(40)</sup> 孟子の「心思」の熟語については、「既竭心思焉、繼之以不忍人之政。而仁覆天下矣。」(離婁上)、と記載が存在する。

<sup>(41)</sup> 曰、今之成人者、何必然。見利思義、見危授命、久要不忘平生之言、亦可以爲成人矣。(憲問14)、(傍点筆者)。

<sup>(42)</sup> 注(9)参照。吉田賢抗、前掲書、307ページ。

<sup>(43)</sup> 注(10)参照。James Legge, *ibid.*, p.280.

□□子、罕（まれ）に利と命と仁とを言う。（子罕9）、（傍点筆者）<sup>(44)</sup>。

孔子が、たまにしか言わないものが三つあった。利益、天命や運命、人間の最高道徳である仁である。なぜならば、利益を計ると義を害することもある。命の道理や摂理は深遠、且つ、微妙でわかりにくい。仁は至上最高の倫理、道徳である。これら三つは、極めて重大であるから、孔子は、慎重にして、まれにしか言わなかった<sup>(45)</sup>。

この命（the appointments of Heaven）<sup>(46)</sup> は、天命や運命という意味であろう。

□□死生命有り、富貴天に在り。（顔淵12）<sup>(47)</sup>。

兄弟子の子夏が、司馬牛に対し、孔子の言葉を引用して、私は、孔子先生から「人間の死生も、富貴も命、天命による。人力ではどうにもならないものだ。」と聞いておられますと言った<sup>(48)</sup>。

この命（their determined appointment；the Decrees of Heaven）<sup>(49)</sup> は、天命の意味である<sup>(50)</sup>。

□□子曰く、命を知らざれば、以て君子たること無きなり。禮を知らざれば、以て立つこと無きなり。言を知らざれば、以て人を知ること無きなり。（堯曰20）<sup>(51)</sup>。

孔子が言うには、君子は、知命、知礼、知言の三つが肝心である<sup>(52)</sup>。

この命<sup>(53)</sup>は、天命の意味であろう。次に孟子における命について、

□□孔子曰く、徳の流行するは、置郵して命を伝えるより速やかなり、と。（公孫丑上）<sup>(54)</sup>。

置郵とは車馬の宿場、早馬や早飛脚の事<sup>(55)</sup>。この命は命令の意味である。

□□妖壽（ようじゅ）貳（たが）わず、身を修めて以て之を俟（ま）つは、命を立つる所以なり、と。（尽心上）<sup>(56)</sup>。

孟子が言うには、「人間は、妖壽、すなわち、短命と長命の人もあるが、その寿命に疑問を抱かず、わが身の修養に務め、天命をまつ、それが天命を十分に全うする理由である。」と<sup>(57)</sup>。この命は天命の意味であろう。

□□仁の父子に於けるや、義の君臣に於けるや、禮の賓主に於けるや、智の賢者に於けるや、聖人の天道に於けるや、命なり。（尽心下）<sup>(58)</sup>。この命は、天命の意義である。

(44) 子罕言利與命與仁。（子罕9）。

(45) 注(9)参照。吉田賢抗、前掲書、192ページ。

(46) 注(10)参照。James Legge, *ibid.*, p.216.

(47) 死生有命、富貴在天。（顔淵12）。

(48) 注(9)参照。吉田賢抗、前掲書、258ページ。

(49) 注(10)参照。James Legge, *ibid.*, p.253.

“Death and life have their determined appointment; riches and honours depend upon Heaven.”

(50) 拙稿「孟子の天道哲学論—孔子と孟子の天、天命と天道—」（論説）『千葉商大紀要』第35巻第1号、千葉商科大学国府台学会、1997（平成9）年6月30日、23—41ページ。

(51) 子曰、不知命、無以爲君子也。不知禮、無以立也。不知言、無以知人也。（堯曰20）。

(52) 注(9)参照。吉田賢抗、前掲書、434ページ。

(53) 注(10)参照。James Legge, *ibid.*, p.354.

この節の「命」を「the ordinances of Heaven」と訳している。

(54) 孔子曰、徳之流行、速於置郵而傳命。（公孫丑上）。

(55) 注(19)参照。内野熊一郎、前掲書、89ページ。

(56) 妖壽不貳、修身以俟之、所以立命也。（尽心上）。

(57) 注(19)参照。内野熊一郎、前掲書、442ページ。



ゆえに、孔子の命は、「利を見て義を思い、危うきを見て命を授け」（憲問14）とあり、この命（life）は、いのち、生命の意味であろう。さらに、「子、罕（まれ）に利と命と仁とを言う。」（子罕9）などとあり、この命は、天命や運命などの意味である。なお、孔子の場合、「命」は、いのち、生命よりも、特に天命に使用されることが数多いと言えよう。次に孟子における命については、「聖人の天道に於けるや、命なり。」（尽心下）などとあり、天命や命令の意義などであると、論者は思考するのである。

## 第5節 孔子の言

『論語』における孔子の言、すなわち、孔子のいう言とは何かを問題にしてみる。

□□子曰く、君子は食飽くことを求める無く、居安きことを求める無く、事に敏にして言に慎み、有道に就きて正す。學を好むと謂う可きのみ。（学而1）、（傍点筆者）<sup>(59)</sup>。

孔子は言う、君子や学問に志す人は、飽食や安楽な住居を求めてはならない。自分のしなければならぬ事は速やかに実行し、言、すなわち、言葉を慎んで、さらに、徳のある先輩に就き従って、自己の過失を正していく。こんな人こそ真に学問好きだといえることができる<sup>(60)</sup>。この言（speech）<sup>(61)</sup>は、話しや言葉の意味である。

□□子貢君子を問う。子曰く、先づ其の言を行いて、而る後に之に従う。（為政2）<sup>(62)</sup>。

子貢が君子について質問した。孔子は答えていう、「言わんとするところを先ず行って、しかる後に言うのが君子である」と<sup>(63)</sup>。

この言は、言わんとするところ、言う意味である。

□□子曰く、君子は言に訥（とつ）にして、行いに敏ならんことを欲す。（里仁4）<sup>(64)</sup>。

□□司馬牛仁を問う。子曰く、仁者は其の言うや訊（じん）すと。（顔淵12）<sup>(65)</sup>。

これらの言も、言葉の意味である。訊（じん）すとは、口から出し洩ることである。

□□子曰く、徳有る者は、必ず言有り。言有る者は、必ずしも徳有らず。（憲問14）<sup>(66)</sup>。

この言は、言葉の意味であろう。前者の言は、道徳的な善言である。

□□德行には顔淵・閔子騫（びんしけん）・冉伯牛・仲弓。言語には宰我・子貢。政事には冉有・季路。文學には子游・子夏。（先進11）<sup>(67)</sup>。言語上は宰我や子貢である。

孔子の『論語』では、このような「言語」や「巧言」などの熟語もある<sup>(68)</sup>。

(58) 仁之於父子也、義之於君臣也、禮之於賓主也、智之於賢者也、聖人之於天道也、命也。有性焉、君子不謂命也。（尽心下）。

(59) 子曰、君子食無求飽、居無求安、敏於事而慎於言、就有道而正焉。可謂好學也已。（学而1）。

(60) 注(9)参照。吉田賢抗、前掲書、30ページ。

(61) 注(10)参照。James Legge, *ibid.*, p.144.

(62) 子貢問君子。子曰、先行其言、而後從之。（為政2）。

(63) 注(9)参照。吉田賢抗、前掲書、48ページ。

(64) 子曰、君子欲訥於言、而敏於行。（里仁4）。

(65) 司馬牛問仁。子曰、仁者其言也訥。（顔淵12）。

(66) 子曰、有徳者、必有言。有言者、不必有徳。（憲問14）。

(67) 德行顔淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓。言語宰我・子貢。政事冉有・季路。文學子游・子夏。（先進11）。

(68) 「言語」の熟語は、「言語宰我・子貢。」（先進11）とある。「巧言」の熟語については、「子曰、巧言令色、鮮矣仁。」（学而1）、（陽貨17）などとある。

次に、孟子の言について、

□□敢えて問う、夫子悪（いづく）にか長ぜる、と。曰く、我言を知る。我善く吾が浩然の氣を養う、と。（公孫丑上）<sup>(69)</sup>。

公孫丑はあえて質問し、「先生は告子と比較して、どういう点でまさっていますか。」と。孟子が言う、「私は善く他人の言葉を理解するし、又私は善く吾が浩然の氣を養うものである。」と。この言は、言葉の意義である。

□□聖人復（ま）た起こるとも、必ず吾が言に従わん、と。（公孫丑上）<sup>(70)</sup>。

孟子は、「昔の聖人がもう一度今の世に出て来ても、きっと私の言うことに従い、是認されるであろう。」<sup>(71)</sup>と述べている。この言は、言うことの意味である。

ゆえに、孔子の言は、「事に敏にして言に慎み、有道に就きて正す。學を好むと謂う可きのみ。」（学而1）などとある如く、この言（speech）は、話しや言葉の意味である。さらに、「子曰く、先づ其の言を行いて、而る後に之に従う。」（為政2）などとあるように、言わんとするところ、言うなどの意味である。

また、孔子の『論語』では、「言語」や「巧言」などの熟語もある。

次に、孟子の言においては、「曰く、我言を知る。我善く吾が浩然の氣を養う」（公孫丑上）や「聖人復（ま）た起こるとも、必ず吾が言に従わん。」（公孫丑上）などとあり、言葉や言うことの意味であると、論者は考えるのである。

### Ⅲ 結 論「孔子の倫理哲学論（6）—道徳論を中心として—」

論者のこの論説、「孔子の倫理哲学論（6）—道徳論を中心として—」の結論としては、帰納法的<sup>(72)</sup>に次のようになる。まず、第1節から第5節までの各節について、

[1] 孔子の我では、「我對えて曰く、違うこと無しと。」（為政2）や、「何か我に有らんや。」（述而7）などとあり、この我は私（I）、自分や自己（me）という意味である。さらに、「我を知る者は其れ天かと。」（憲問14）などとあり、この我も私の意味である。次に、孟子における我は、「我四十にして心を動かさざりき、と。」（公孫丑上）や、「孟子曰く、萬物皆我に備わる。」（尽心上）などとあり、私や自分の意義であると、論者は思考するのである。

[2] 孔子の吾では、「吾十有五にして學に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。」（為政2）とあり、この吾（I ; Ich）は、私の意味である。さらに、「子曰く、吾回と言う、終日違わざること愚なるが如し。」（為政2）や「子曰く、聖人は吾得て之を見ず。」（述而7）など、これらの吾も私や自分の意味であろう。

次に、孟子の吾においては、「吾對えて曰く、一に定まらん、と。」（梁惠王上）や「曰

(69) 敢問、夫子悪乎長、曰、我知言。我善養吾浩然之氣。（公孫丑上）。

(70) 聖人復起、必從吾言矣。（公孫丑上）。

(71) 注(8)参照。内野熊一郎、前掲書、98ページ。

(72) 拙稿「イギリス経験論とカントの哲学—経験の意義—」（論説）『千葉商大紀要』第23巻第3号、千葉商科大学国府台学会、1985（昭和60）年12月31日発行、1—26ページ。

また、拙稿「倫理学とは何か [3]—西洋哲学、倫理学と関連して—」（研究ノート）『千葉商大紀要』第46巻第4号、千葉商科大学国府台学会、2009（平成21）年3月31日発行、35—45ページ。

く、我言を知る。我善く吾が浩然の氣を養う、と。」(公孫丑上)などとあり、これらの吾も、私や自分の意義であると、論者は考えるのである。

[3] 孔子の思では、「子曰く、詩三百、一言以て之を蔽う。思い邪(よこ)しま無しと。」(為政2)の如く、この思(thoughts)は、思い、思慮や心に感じるの意味であろう。さらに、聖人・孔子は、「學びて思わざれば則ち罔し。思いて學ばざれば則ち殆(あやう)し。」(為政2)などと述べて、これらの思は、思考や思索などの意味がある。

次に、堯聖・孟子における思については、「思いて服せざる無し」(公孫丑上)や「誠を思うは、人の道なり。至誠にして動かざる者は、未だ之れ有らざるなり。」(離婁上)などとあり、これらの思は、思う意義であろうと、論者は思考するのである。

[4] 孔子の命では、「利を見て義を思い、危うきを見て命を授け」(憲問14)とあり、この命(life)は、いのち、生命の意味であろう。さらに、「子、罕に利と命と仁とを言う。」(子罕9)などとあり、この命は、天命や運命などの意味である。なお、孔子の場合、「命」は、いのち、生命よりも、特に、天命に使用されることが数多いと言えよう。

次に、孟子における命については、「聖人の天道に於けるや、命なり。」(尽心下)などとあり、天命や命令の意義などであると、論者は思考するのである。

[5] 孔子の言では、「事に敏にして言に慎み、有道に就きて正す。學を好むと謂う可きのみ。」(学而1)などとある如く、この言(speech)は、言葉の意味である。さらに、「子曰く、先づ其の言を行いて、而る後に之に従う。」(為政2)などとあるように、言わんとするところ。言うなどの意味である。また、孔子の『論語』では、「言語」や「巧言」などの熟語もある。

次に、孟子の言については、「曰く、我言を知る。我善く吾が浩然の氣を養う、と。」(公孫丑上)や「聖人復(ま)た起こるとも、必ず吾が言に従わん。」(公孫丑上)などとあり、言葉や言うことの意義であると、論者は考えるのである。

ところで、なぜ孔子は、これら我、吾、思、命、さらに、言などの倫理、道德哲学を主張したのかが問題であろう。先ず、それは古代中国、周の春秋時代の状況とも関連して、聖人・孔子の偉大で規範的な人格などに基づくと言える。特に、春秋時代は、迫り来る動乱の戦国時代を控え周の天子が没落していく過程であり、孔子は、周代の王族であり文武で活躍し業績を修めた周公旦を理想的な人物として、

□□子曰く、甚だしいかな、吾が衰(おとろ)えたるや。久しいかな、吾復(また)夢に周公を見ず。(述而7)<sup>(73)</sup>。

と嘆いた如く、孔子は、政策的に善き国家建設のビジョン(Vision)を持ち、その政治の実現を願望していたゆえでもあろう。そのことは、以前の論説における孔子の仁、義、礼、知、信や愛の道德哲学論<sup>(74)</sup>、学、道、徳、善や天の倫理哲学論<sup>(75)</sup>、自、己、教、論や朋友などの倫理哲学論<sup>(76)</sup>、孝、志、勇、敬や師などの倫理哲学論<sup>(77)</sup>、聖、賢、生、富や倫<sup>(78)</sup>、

(73) 子曰、甚矣、吾衰也。久矣、吾不復夢見周公。(述而7)、(傍点筆者)。

また、注(5)参照。拙稿、前掲論文「『孔子の倫理哲学論(4)』(論説)」, 11ページ。

(74) 拙稿「孔子の道德哲学論—四徳(仁、義、礼、知)論を中心として—」(論説)『千葉商大紀要』第42巻第3号、千葉商科大学国府台学会、2004(平成16)年12月31日発行、1—15ページ。

(75) 拙稿「孔子の倫理哲学論(1)—道德論を中心として—」(論説)『千葉商大紀要』第43巻第3号、千葉商科大学国府台学会、2005(平成17)年12月31日発行、83—99ページ。

さらに、前回の論説におけるこれら安、心、美、楽や力の倫理哲学論<sup>(79)</sup>はもとより、今回の論説におけるこれら我、吾、思、命、さらに、言などの孔子の倫理、道徳哲学は、人間としての基本的な理念 (Idee) であり、眼目であったと、論者は思考するのである。

さらに、論者のこの論文、「孔子の倫理哲学論 (6)」では、ロゴス (logos) 的に体系化 (systematization) して、その中身を「哲学する」(philosophieren)<sup>(80)</sup> ことを試みた。

よって、このような内容により、論者の「孔子の倫理哲学論 (6) —道徳論を中心として—」[Confucius' Philosophical Theory of Ethics (6) —Attaching Importance to His Theory of Morality—] の論説は、過去、現在、未来の三世に渡り、多少なりとも意義と価値があろうかと、論者は考えるのである。

…………… {2010 (平成22) 年 6 月21日 (月曜日), 原稿提出} ……………

---

(76) 拙稿「孔子の倫理哲学論(2)—道徳論を中心として—」(論説)『千葉商大紀要』第44巻第3号、千葉商科大学国府台学会、2006 (平成18) 年12月31日発行、1—12ページ。

(77) 注(6)参照。拙稿、前掲論文 [[孔子の倫理哲学論(3)] (論説)], 1—12ページ。

(78) 注(5)参照。拙稿、前掲論文 [[孔子の倫理哲学論(4)] (論説)], 1—12ページ。

(79) 注(4)参照。拙稿、前掲論文 [[孔子の倫理哲学論(5)] (論説)], 1—14ページ。

(80) 注(1)参照。Immanuel Kant, *op. cit.*, A837, B865—A838, B866, S. 752—753.

[抄 録]

孔子の倫理哲学論 (6)  
—道徳論を中心として—

浅 井 茂 紀

この論説は、目次、Ⅰ序論、Ⅱ本論、第1節孔子の我、第2節孔子の吾、第3節孔子の思、第4節孔子の命、第5節孔子の言、Ⅲ結論、から成立している論文(注付)である。

孔子の我、吾、思、命や言とは何かを問題にしてみた。それらの根拠として、儒学における『論語』や『孟子』などの出典を提示して、各々の内容を分析や総合し問題にしてみたのである。また、中国古代、孔子は、仁、義、礼、知、信や愛の哲学はもとよりのこと、聖、賢、生、富、倫や安、心、美、楽、力の哲学だけでなく、本論では、如何に、なぜそれら孔子の我、吾、思、命や言などの倫理 (Ethics)、道徳哲学 (moral philosophy) を主張したのかを問題にし、吟味してみたのである。

つまり、孔子の倫理哲学は、人間としての基本的な理念 (Idee) ではなかろうか、ということをロゴス (logos) 的に体系付けて、その意義と価値を多少なりとも考察した論説である。

—Abstract—

Confucius' Philosophical Theory of Ethics (6)  
—Attaching Importance to His Theory of Morality—

ASAI, Shigenori

This paper aims at clarifying Confucius' thoughts, and comprises Contents, I. Introduction, and II. Confucius' theory. The theory comprises II.1 Confucius' thoughts I or me, II.2 Confucius' I, II.3 Confucius' thoughts, II.4 Confucius' life, or the appointments of Heaven, II.5 Confucius' speech. The final part is III. Conclusions. (Notes appear at the end of the paper).

It hereby remains to be seen what Confucius' thoughts I or me, Confucius' I, Confucius' thoughts, Confucius' life, or the appointments of Heaven, and Confucius' speech are.

As the grounds for clarification of these items, details of the individual items are analyzed and later synthesized to take them up as problems by giving sources such as Confucian Analects, The Works of Mencius, etc. in Confucianism.

At the same time, it is discussed why in the olden time of China, Confucius advocated ethics and moral philosophy such as Confucius' thoughts I or me, Confucius' I, Confucius' thoughts, Confucius' life, or the appointments of Heaven, and Confucius' speech, with regard to not only benevolence, right, propriety, knowledge, sincerity, and love, but also Confucius' a sage, men of worth, life, riches, reason, and Confucius'



ease, Confucius' mind, Confucius' perfect beauty, Confucius' delight, Confucius' strength, etc.

That is to say, the paper intends to make observation in connection with the significance and value by systematizing them in a logostic manner with a view to explaining whether Confucius' ethical philosophy is the fundamental ideas (Idee) as a human being or not.